

タイトル:平成30(2018)年度 研究セミナー(第19回)

日時:2018年12月22日(土)~23日(日)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3階マルチメディアセミナー室(306)

「私の博士論文」

野田 仁 (AA 研)

本報告においては、これから博士論文を執筆・提出する予定の受講生に対して、良くも悪くも参照例となることを目的として、自身の博士論文(2008年9月提出)について、概要・手法・資料調査などについて簡単に説明を行った上で、どのようなスケジュールで完成させるにいたったのかというプロセスについて体験を述べた。併せて論文執筆後に図書(和文・英文)として刊行した際の経験も参考として提示することにした。

博士論文のテーマは、中央アジアにおけるカザフ遊牧民の歴史を対象とし、大きな分類としては、18世紀~19世紀半ばの国際関係史であり、カザフ遊牧民の動向をロシア・清の二帝国双方との関係の中に位置付けることを目的としていた。その結果として、とくに清との関係におけるカザフの曖昧な帰属が明らかになり、それは今日の民族の分断的状況(新疆とカザフスタン)の背景ともなっていることを論じたのである。

手法—これは後々自分の研究をアピールするうえで重要と報告者は考えている—は、マルチ=アーカイヴスによって、とくに外交文書と現地の行政文書とを組み合わせることによって、それぞれの立場を明らかにすることを主眼に置いていた。また、帝国統治と、移動する民族集団の状況を同時に把握することを目指していた。このため、史料として、ロシア・中国双方の公文書が想定され、そのための調査を必然としていた。さらに、イスラーム的な要素として、新疆在住のロシア籍タタール人による歴史叙述史料にも注目していた。

報告者が自分の体験を述べる中でもっとも強調したかった点は、スケジュール管理であり、論文提出から逆算し、また論文全体のイメージを踏まえて、各章を整えていくということである。ある意味では、ルールに乗って(制度にしたがって)淡々と作業を進めることが重要ではないかと考える。また、その際に口頭報告などの機会を利用して、他者のコメント・批判を受ける機会を積極的に作ることを推奨した。そのほかの留意点として、研究資金の確保なども、海外調査のことなどを踏まえれば、言うまでもなく重要になってくるだろう。

質疑では、留学先での体験や語学学習のことから論文執筆中の心構えなどにまでさまざまな質問が寄せられた。報告・質疑を通して、反省すべき点が改めて浮かび上がったように思い、そのような轍を踏まないことを受講生に意識してもらうことができたこととすれば幸いである。